

第10回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール

◆審査員からのコメント◆

【課題図書『If I Was a Banana』について】

もしみなさんがバナナなら、どんなバナナですか？ 山なら？ 鳥なら？ 男の子が空想と現実の狭間でそんなふうに分を何か照らし合わせつつ内面を自分自身で分析してゆく様子が描かれた作品です。

後ろ姿。シルエット。頭頂部。フードを深々と被った横顔。足元のアップ。男の子は、なかなか顔を見せてくれません。お話の終わりになって、自分は自分であるのがいいという気づきを得てはじめて、力強さを宿した目をして正面を向いてくれるのです。そして、クルッと後ろを向いて奥へと続く一本道でお友達と合流した男の子は、湖から立ち昇る雲に姿を変えた仲間たちに見守られつつ二人で金色の小高い丘を駆け登ってゆくのでした。隠し絵の仕込まれた終幕の見開きはさながらカーテンコール。息を呑む美しさです。

ニュージーランドはホークスベイ地区のハヴロック・ノースにある、有機野菜を使ったピザで知られるレストランのオーナーシェフでもあるアレクサンドラ＝タイリーの文に、広告業界で高い権威を誇るリュートアーズ・アーカイブ誌が選ぶ「世界のイラストレーターベスト200」にその名を連ねたこともある、ウェリントン在住の若きマルチ・クリエイター、キーラン＝ラインハートが絵を添えた本作は、タイリーの（レシピ本以外での）デビュー作です。

【審査のポイント】

翻訳とは伝えることです。翻訳者は原文の読者であり訳文の著者です。原文の内容をしっかりと読みとって、それが読者に伝わるように訳文を書かなくてはなりません。原著者が伝えたいことが誰にも伝わらないような拙い表現で訳文を書いたり、原著者ではなく自分が読者に伝えたい内容を勝手に訳文に盛り込んだりしたのでは、翻訳者失格です。そこで、(A) 原文の内容をきちんと理解できているかどうか、(B) 原著者が読者に伝えたいことを過不足なく訳文でしっかり表現できているかどうか、という2つの側面から応募作品を審査しました。その際とりわけ注目した点は、1) 内容の正確さ（誤解や独り善がりの創作がないかどうか）、2) 訳出表現力（日本語の正しさ・自然さ&表現上の工夫）、3) 訳文のリズム（音の面白さ）、4) 訳文のテンポ（流れの良さ）に加え、5) 絵本にふさわしい表記（漢字の制限的使用・分かち書き・ルビ振り）等です。

【総評】

応募作品はどれもこれも意欲的で、どの作品にも必ずキラッと光る箇所がありましたので、審査の過程はそれを発見する喜びに満ちたものとなりました。応募してくださったみなさん、ありがとうございました。

審査を進めるうちに、多くの応募作に共通して目立った問題点が浮かびあがってきました。それらは、（1）読解の甘さ、（2）推敲の甘さ、（3）翻訳を超えた創作の3つに大別できます。それぞれ例を挙げながら説明します。

【目立った問題点】

（1）読解の甘さ

（1-1）原文：“...the rumbling volcano that never **blows its top (well, never enough to hurt anyone).**”

前半部分：“**blows its top**”

残念な訳例：「てっぺんにはぜったい風がふかない」、「てっぺんは風がふきつづけても」

解説：“blow”という動詞の意味を「(風が)吹く」だと早とちりしてしまったようです。「自らの頂を決して“blow”しない火山」という構造を読み取れていれば、「爆破・破壊」つまり「吹き飛ばす」という意味だと気づけたことでしょう。

よく理解できない箇所ほど想像に頼ってしまうかもしれませんが、意味とは当てずっぽうで決めるものではなく、掴むものです。すんなり腑に落ちない箇所が出てきたら、文の作りや前後の文脈を分析してから辞書の該当項目を隅々まで読んでピッタリくる訳語を掴み取り、それを下敷きに訳出表現を紡ぎましょう。

後半部分：“...(well, never enough to hurt anyone).”

残念な訳例：「そして誰も傷つけないんだ」、「そうすれば決して誰も傷つけないんだ」

解説：直訳すると「うーん、誰かを傷つけるのに十分なほどには決してしない」となります。何を「決してしない」かと言えば、それは直前の動詞が示す「噴火」です。つまり、(火山爆発は決してしないと宣言した直後に)「小規模の噴火はしたとしても、誰かを傷つけるような大規模な噴火はしないよ、絶対に」とカッコ付きで断りを入れていることがわかります。

「決して噴火はしないんだ→そうして誰も傷つけないんだ」という流れは訳文だけ読むと筋が通っているようですが、絵と矛盾しています。だって、絵の火山は山頂のトンガリから遠慮がちに火を吹いているのですから。ということは、ここでのお話の流れは「決して噴火はしないんだ→したとしても誰かを傷つけるような大爆発は絶対しないんだ」というのが正解です。絵は原文と一体ですから、訳文が絵と矛盾する場合は訳文が間違っているのです。

(1-2) 原文：“If I was a spoon I would be that one—perfectly shaped and worn, with the silver fading in all the right places.”

残念な訳例：「ただし位置におかれている」、「決まったところにしまっている」、「右側にある」

解説：“with the silver fading in all the right places”がひとかたまりで“worn (使い古された・擦り切れた)”の追加説明になっているという構造を見落としてしまったようです。直訳すると、使い古されて「適切な箇所すべてで銀が褪せている」となります。さて、どういうことでしょうか？

使い古されるうちに、スプーンは幾度となく洗われます。そうすると毎回スポンジで強く擦れる箇所に細かい傷ができて元の輝きが失われたりメッキがハゲたりします。使っているうちに自然にハゲる場所＝ハゲて然るべき場所＝ハゲるのが適切な箇所＝“the right places”です。使い込まれることで自然に生じる使用感の描写ですね。これを絵本にふさわしく表現するのは至難の業ですが、だからこそ腕の見せ所です！

(1-3) 原文：“But then, maybe a much smaller, lighter, fluffy sort of cloud...”

“...who knows, maybe I would be a very brave, bright red ladybird, and fly very high without a care in the world.”

残念な訳例：

But then：「すぐに」、「そのあと」

Who knows：「誰か知っていると思う」、「誰かは知っているよ」

Without a care in the world：「世界の中で注意せず」、「世界に興味がないみたいに」

解説：成句を単語に分解してしまったようです。どれも日常的によく使われるフレーズなのですが、あまり馴染みがない人が多かったのかもしれませんが。

フレーズとしての意味は、それぞれ以下の通りです。

But then : 「とはいえ・しかしながら・一方では」

Who knows : 「ひょっとしたら・～ってこともあるかもよ」

Without a care in the world : 「何の悩みもなく・呑気に」

単語を辞書で引いてもフレーズとしての意味にたどり着けないこともあると思います。何か引っかかるなあ……と思ったら、例えば“who knows”のように、二重引用符で囲って、ひとかたまりでネット検索してみるとヒントが得られますよ、きっと。

(2) 推敲の甘さ

(2-1) 原文 : “If I was a banana, I would be that one, all yellow and fat and **full of banana.**”

残念な訳例 : 「バナナでいっぱい」 (「たくさん実った」という訳出も多かったのですが、1本のバナナの話をしているのですから、それは読解の間違いです)

解説 : “full of banana” を直訳すると確かに「バナナでいっぱい」ということなのですが、「バナナでいっぱいのバナナ」と日本語で言ったのでは文学的を通り越して奇妙な表現と受け止められそうです。このように素直に訳出しただけでは伝わらない可能性があるときは、訳出表現をしっかりと練り直しましょう。ただし、原著者が伝えたい内容を過不足なく訳文で再現するためには、推敲の前に原文の意味を厳密に把握しておかなければなりません。

まずバナナがどのように言葉で説明されているか確認します。

All yellow: (未熟で首が青いわけでも、完熟して茶色い斑点があるわけでもない)

どこもかしこも黄色一色の

Fat: (長さの話ではなく) 直径が太い

Full of banana: 中身がパンパンに詰まった

次に絵を確認します。フルーツスタンドに1本のバナナが載っています。背景は、雲間から後光が射し、フルーツスタンドを中心に集中線が描かれています。

ここまで把握したら準備OKです。バナナ感に溢れる表現に訳してください！

(2-2) 原文 : “If I was an elephant, I think I would have to be very careful **where I put my feet.**”

残念な訳例 : 「足を置く場所」、「どこに足を置くか」、「大きな足で仲間を踏まないよう」

解説 : こちらも直訳すると確かに「どこに足を置くか」なのですが、日本語では「足踏み」のことを「足置き」と言い換えられません。ということは「どこに足を置くか」ではなく「どこを踏むか」と表現すべきだということです。

でも「どこを踏むかにとっても注意しないと」と修正しただけでは、表現のぎこちなさが残ります。練り直しが必要です。ただし、その前に場面を厳密に分析しておく必要があります。

言葉については「置く」ではなく「踏む」であることをすでに確認しました。気になるのは「大きな足で仲間を踏んづけないように気をつけなきゃ」と言っているのかどうかです。

2コマの絵をよく比べながら、ゾウの足のサイズ感を観察してください。床に散りばめられた動物フィギュアの大きさを基準に少年の足とゾウの足を比べると、両者のサイズがほぼ一緒だとわかりますね。ですから、ゾウの足が「大きい」からという理由で「どこを踏むか気をつけなければいけない」と少年が思っている、とは断定できません(もしかしたら、足が2本ではなく4本になるから気をつけて歩かなくちゃ、と思っているのかも)。

こうやって文と絵をしっかりと読み込むと、この場面は原文の読者に「足が大きくなるからかな」とか「4本足になるからかな」と解釈する余地を残したものであるということがわかりま

す。であるなら、訳文の読者にも同様に解釈の余地を残すのが鉄則です。なので、訳文に「大きい」とか「4本」といった余計な情報を追加すべきではないのです。

さて、どう訳し直しましょうか？

(2-3) 原文：“If I was a little boy, or a big one...”

残念な訳例：「もし僕が男の子になれるんだったら」、「もし僕が少年なら」、「もしぼくが男の子だったら」

解説：こちらでも直訳すると確かに「もしぼくが男の子だったら」なのですが、主人公は最初から男の子なのです。男の子に「もし僕が男の子になれるんだったら」と言われたら、読者は混乱してしまうでしょう。

もう一度原文をよくみると、“a little boy, or a big one”となっていて、性別ではなく“little”か“big”かが焦点だということがわかります。

さて、それがはっきり読者に伝わるようにするために、どんな表現に直せばよいでしょうか？

(3) 翻訳を超えた創作

原文：If I Was a Banana (タイトルの訳)

残念な訳例：「ぼくは何にでもなれる」、「いいな いいな なりたいな」

解説：より魅力的なタイトルを目指して捻りを加えてくださった意気込みは素晴らしいのですが、(ビジネス上の都合で出版社が翻訳版のタイトルを原題とは異なるものにするところがあるとは言え) 翻訳者がむやみにタイトルを変えてしまうのは考えものです。なぜなら、原著者が自身のことばで表現した内容とは異なる翻訳者の解釈を訳文の読者全員に押し付けることになってしまうからです。果たしてそれで原著者や読者の方々が喜んでくださるのでしょうか？

仮に“If I Was a Plantain”という原題だったとして、これを「もしぼくがプランテンだったら」と訳してもプランテンが調理用バナナだをご存知の方は多くはなさそうです。翻訳者としてタイトルを変えるかどうか決める必要があるのは、主にこのような場合です。お話の展開に影響せず絵ともズレないことを確認しつつ「バナナ」と言い換えるかどうか慎重に判断するのです。

翻訳者の創造性は、例えば“The Very Hungry Caterpillar”を「食欲旺盛な芋虫」や「とてもおなかのへったあおむし」などといった数ある訳し方の中から「はらぺこあおむし(エリック・カール著、森比左志訳)」という最適解を選び取る力として発揮されるものです。これを原著者に断りなく「蝶々になった青虫」に変えてしまったら、それは翻訳を超えた創作です。(しかもこの創作例は、タイトルでネタバレというお粗末な出来ですね。)

翻訳を超えた創作は本文の訳出にも見られました。原文には登場しない母親に主人公が「ねえ、お母さん」と語りかけていたり、使い込まれたスプーンが「いつもおじいさんの使っているスプーン」になっていたり、創意工夫を凝らそうとくださった心意気は素晴らしいのですが、原著者からお叱りを受けてしまいそうです。

こうした問題を避けるためには、原文のオモテ(原文の意味)もウラ(作者の意図)も絵の隅々までも理解し尽くした上で、素直に訳しましょう。そして、素直に訳しただけでは読者に正しく伝わらないときにだけ「表現をどう変えれば原意を変えずに伝えられるか？」と苦吟しましょう。翻訳の^{たいか}大家、井口耕二先生がスティーブ・ジョブズ氏の“Stay hungry, Stay foolish.”ということばを「ハングリーであれ、バカであれ」ではなく「ハングリーであれ、分別臭くなるな」と訳出されたように。